

Rāmānuja における brahman と現象界

石 飛 貞 典

R(āmānuja) がその師 Y(āmuna) から大きな影響を受けたことは広く認められており、br(ahman) と現象界の問題に関しても例外ではない。ところで、R における br と現象界の教説の中で最も重要な概念は prakāra と śarīrātma-bhāva であろう。そこで本稿では Y の説との対比を通して、この問題に対する R の立場を明らかにしたい。

I Y はその著 S(amṣvit) S(iddhi) において Ch(āndogya) Up(aniṣad) 6.2.1; 6.8.7 等の解釈をめぐって br と現象界、br と āt(man) の関係についての議論を展開している。その主張は次の如くである。

- (1) Ch Up 6.2.1 の “advitīyam” は br と同等 (sama) 或いは優越する者 (abhyadhika) を否定するものである。(100¹⁴-101¹)
- (2) 一切世界は br の威力の顕現 (vibhava-vyūha) のほんの一部であり、advitīya として否定されるべきものではない。(101¹⁻²)
- (3) 火花と火の如く、結果たる現象界は原因たる br と異なる (ananyat)。(101¹⁵)
- (4) 精神的・非精神的なものから成る (cid-acin-maya) 現象界は br を āt として生じたものであって br の威光 (vibhūti) であり、否定されない。(102¹⁻³)
- (5) Ch Up 6.8.7 等の “tat tvam asi” の tat と tvam は個我と最高者 (para) の一体性 (tādātmya) を説くものであるが、この一体性なる関係は不一不異ならざるもの (abhedābhedin) には成立しない。(104²⁻⁴)

ここで注意すべきは、Y が R の用いる śarīrātma-bhāva や prakāra 等の用語を全く用いていない点である¹⁾。R は V(eda) A(rtha) S(amgraha) や Ś(ri) Bh(aṣya) で繰り返し世界は br の śarīra, prakāra であると説くが、Y は(2)、(4) で一切世界は br の vibhūti 或いは vibhava の顕われと説くにすぎない。また(3)で火花と火という Bhedābheda で用いる (cf. Bhāskarabhāṣya ad BS 1.4.1) 比喩を使い、(5)で個我と最高者の関係たる一体性が不一不異ならざるものには成立せぬとする等、Bhedābheda 的傾向を示していることも興味深い事実である。

この他に、br と現象界の関係についての Y の説を知りうる資料として、Ā(tma) S(iddhi), Ī(śvara) S(iddhi) に次の文がある。

- (6) nānātve saty evābhedo nāmānvayaḥ aṃśāṃśi-bhāva-lakṣaṇaḥ, samavāyaḥ paratantratā-lakṣaṇaḥ, śeṣa-śeṣitva-rūpaḥ sva-svāmi-bhāvaḥ bhṛtya-svāmi (-bhāva?) -lakṣaṇa[h]
- (7) vibhūti-padābhidheyam kṛtsnam ekādheya-vidheya-śeṣa-bhāvam, tac-charīrat-vāt, mac-charīratvat.

(6)は Y が ĀS の冒頭で āt や最高 āt に関して諸異説を列挙するうちの, āt と最高 āt の関係についての異説の第四番目で, これは Y の定説とみなされている。ここでは, aṃśāṃśin, śeṣa-śeṣin 等の R も用いる概念が説かれているが, SS の場合と同様, śarīra, prakāra は用いられず, また多様性と無区別を説いている。(7)は ĪS の最終部分の異説で ChSS 版に“.....iti kvacit pāṭham”として引かれている。ここで世界が唯一者の身体として説かれているのは重要な意味を持ち得る。何故なら, 他の箇所では Y は世界を br の身体と明示していないからである。しかしこの異説はその根拠が不明なため, 直ちには採用できない²⁾。

以上のことから, Y 説の特徴としては, (a) 世界を br の vibhūti とする³⁾, (b) Bhedābheda 的傾向が見られる, という二点を挙げることができよう。

II 次に R の場合を VAS, ŚBh を中心にして検討する。R は br を paramānman, paraṃ brahma, puruṣottama, Nārāyaṇa, bhagavat, Vāsudeva 等と呼び, īśvara と交換可能な場合も多い。br は一切世界の生起・存続・消滅を戯れとし, あらゆる欠点を排し, 無限で卓越した無数の美德の集まりを具え, 自己以外的一切と異質である (VAS § 134)。また br は美しい姿形・装身具や様々な武器等を持ったものとして描かれ (VAS § 134, Śaraṇāgatigadya. cf. Stotraratna st. 31 以下), 念想の対象 (upāsya) でもあるとされる (ŚBh 1.1.1, 200²⁻⁴⁾)。一方, 現象界は精神的・非精神的なもの (cid-acid) からなり (VAS § 6 等), 実在する (ŚBh 1.1.1, 220⁶⁾)。これは Y が(2)で説くところであった。また, この現象界は br の結果 (kārya) である。これも Y が(3)で説いていた。ところで, 結果とは同一物が他の状態になること (avasthānyāpatti) であり (ŚBh 2.3.18, 357¹⁴⁾), 現象界が結果であるとは名称や形態が区別されぬ微細な状態にある物質的原理 (prakṛti) と精神的原理 (puruṣa) を身体とする br が名称や形態の区別された粗大な cit, acit を身体とする状態となることである。つまり原因の状態にある br が結果の状態にある br となるのが世界の創造であり, その逆が帰滅である (VAS § 74)。この時, cit は知の拡張 (jñāna-vikāsa) なる変異によって結果となり, acit は本質そのものの変異 (svarūpānyathā-bhāva-vikāra) によって結果となる (ŚBh 2.3.18,

357¹⁵⁻¹⁷) が, br そのものは変異しない (VAS §73)。ただ br の様態 (prakāra) たる cit, acit のみを変異し, この様態の変異によって br が原因と結果との二つの状態となるのである。

様態とは, ある事柄が「これはかくかくのものである (idam ittham)。」と認識されている時の ittham のと認識される部分 (amśa) である (ŚBh 1.1.13, 222⁵⁻⁶)。様態となりうるものには二通りある。一つは jāti や guṇa の如く, ある実体の形状 (samsthāna) としてのみ存在しその実体を離れては成立しないもの (a-prthaksiddhi) で, もう一つは独自に形状を持ち (prthak-samsthāna-samsthita) それ自身としてある (sva-niṣṭha) もの, 例えば杖 (daṇḍa), 耳飾り (kuṇḍala) 等である (VAS §68, ŚBh 1, 11, 122¹⁻³)。前者の場合は共通基体性 (sāmānādhikarānya) によって示され, 後者の場合には所有を表わす接尾辞 -in を付して daṇḍin, kuṇḍalin の如くに表わされる (VAS §68)。

また, 上述の如く br は原因の状態と結果の状態を通して精神的原理や物質的原理, 或いはその変異たる cit や acit を身体とするが, ここで言う身体とは,

「或る精神的存在 (cetana) にとって或る実体が, 完全に, [前者] 自身のために, 支配され (niyamtuṃ) 保持されること (dhārayituṃ) が可能であって, そ [の前者] の従属物たることのみを本質とする時, そ [の後者] がそ [の前者] の身体である。」 (ŚBh 2.1.9, 222^{11-223¹})

と定義づけられるもので, 一般的意味での身体より広い概念である。これは Y の(7)に見られる考え方と殆んど同一であるが, 前述の如く(7)は直ちに Y 説とは認め難く, この点については Y と R が同じ考えであったとは言い切れない。

さて, 世界がこのような意味で br の身体であるとする, 世界は br と別個に成立しえぬものとなる。世界が br の身体であることは Bṛh Up (Mādhyamīna recension) 3.7.3-22, Subāla Up 7.1 等が典拠とされる (VAS §65)。ところで先に二種の様態のうち aprthaksiddhi なるものは共通基体性によって示されると規定されているのを見た。正理・勝論学派では普通 jāti と vyakti, guṇa と dravya の関係は内属 (samavāya) とされるが, R はあえて内属を用いず aprthaksiddhi と表現している。これは R がこの種の様態に上述の身体のような実体 (dravya) を含めようよう意図しているためである。こうして br の身体なる世界は共通基体性によって br の様態として示されることとなる (VAS §68)。共通基体性とは,

「二つの語が二つの様相に基づいて同一物に用いられること」 (VAS §65)

である。(5)に示したように, Y は ChUp の “tat tvam asi” が tat と tvam の一

体性を表わすとして Bhedābheda 的傾向を示していたが、R はこの両者は様態とそれを持つもの、身体と āt の関係による一体性であるとみなし (VAS § 60), tat は世界原因でありすべての美德の宝庫であり欠点のないものである br を表わし、tvam は精神的存在 (cetana) [たる個我] と共通の基体を持って存在することによって個我の内制者 (antaryāmin) であり個我を様相とする br を表わす (VAS § 65) と説き、br と個我が bhinnābhinna となるのを避けている。

III 以上の如く、R において br と世界の関係は主に prakāra, śarīra 等の概念を用いて説かれている。Y が用いた vibhūti も使用しないわけではないが用例は比較的少ない⁴⁾。これには次の理由が考えられる。即ち、世界を br の vibhūti とするのみでは br と世界関係を明確に示しえない。正理・勝論学派で用いる samavāya, saṃyoga 等の関係概念は世界と br の関係を示すには適当でない。前者では実体間関係には用い得ず、後者では結合関係の必然性・永遠性を示し得ない。また、世界と br は別異でなく (ananyat) (VAS § 22 等)、世界は br を離れては存しえない。かと言って直ちに世界と br が tādātmya の関係にあるとすると、世界に存する様々な欠点が br にもあることになる。そこでこうした問題を一挙に解決する手段として śarīrātma-bhāva、或いはそれをもう少し普遍的に説いた prakāra-prakāri-bhāva が導入され、世界と br は Hiriyanna の言う “complex whole”⁵⁾ を形成し、van Buitenen の言うように “difference in union” への R なる解答⁶⁾ が提出されたと考えられる。R は基本的には Y の立場を踏襲するが、そこに prakāra, śarīra という概念を導入したところに彼の思想史的意義があり、またこれにより彼は viśiṣṭādvaita 哲学を完成させ得たのである。

SS, ĀS, ĪS.....Sri Yamunamuni's Siddhi Traya, Madras 1972.

VAS.....J. A. B. van Buitenen, Rāmānuja's Vedārtha-saṃgraha, Poona 1956.

ŚBh.....Brahmasutra Sribhāsyā with Sruta Prakasika, 2 vols., Madras 1967.

1) SS 101¹⁰⁻¹¹, 101¹⁴ の “ittham-bhāva(-tā)” を prakāra(-tā) とする Gūḍhaprakāśa 等の解釈は読み込みすぎであろう。

2) cf. van Buitenen, *ibid*, intr. p. 45.

3) cf. W. G. Neevel, Jr., Yāmuna's Vedānta and Pāñcarātra, Montana 1977, p. 163-4; p. 282 n. 71.

4) cf. J. B. Carman, *The Theology of Rāmānuja*, p. 140 以下。

5) Hiriyanna, *Outlines of Indian Philosophy*, p. 399.

6) van Buitenen, *ibid*, p. 226, f. n. 258.

(駒沢大学講師)